**渋沢栄一と朝鮮**

**－ある実業人の経済進出－**

**3年　鈴木崇信**

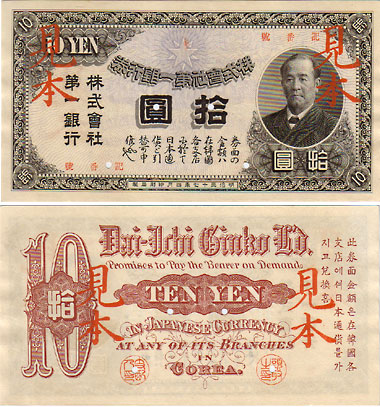
**1.はじめに**

渋沢栄一（1840-1931）は近代的銀行の育成に数多くかかわり、多方面の株式会社の設立に助言し、経営指導に努力をした。特に、1873年に創立された第一国立銀行は日本初の近代的銀行と知られている。1878年に第一国立銀行が朝鮮に進出したことから、朝鮮にも金融システムをはじめとした近代資本主義を導入することを試みた。

渋沢と朝鮮に関して象徴的なものがある。彼の肖像が印刷された第一国立銀行の銀行券だ。日本の帝国主義進出、植民地経営の一部として語られている。渋沢は第一国立銀行の朝鮮進出、京釜鉄道株式会社、京仁鉄道合資会社、韓国興行株式会社など合計で10社ほど関わったとされている。[[1]](#endnote-2)(1)朝鮮の進出には積極的であった一方で、「兎に角朝鮮は独立せしめて置かねばならぬ、それは日本と同様の国であると考えていたのである。」と経済以外の進出は好まなかった。

本稿では、『渋沢栄一伝記資料』を主に参照しながら、渋沢の考えた朝鮮への進出を考察する。

株式会社第一国立銀行券(10円)



画像出典:　第一国立銀行社史より

**2.第一国立銀行の進出**

周知のとおり、第一銀行は日本初の近代的な銀行であり、出資は財閥である、三井組と小野組によりなされ、経営は渋沢にまかされた。1876年の日朝修好条規が締結されたことにより、日朝間の貿易が開始されることになった。この際に、大久保利通から朝鮮への経済進出を打診された大倉喜八郎が、渋沢栄一に第一銀行の進出を呼びかけた。株主の三井関係者は難色を示したため、1887年には共同出資にて釜山に為替の交換所を設けたが、大蔵省が銀行と他の商社と共同経営するのは許しがたいとのことで、渋沢の主導権により1878年第一国立銀行釜山支店が開設された。以後、各地に営業所が設置され、早くも業務展開がなされた。当初は業績の低迷が続いたが、1905年には朝鮮国庫の取扱、貨幣調整事業、第一銀行券公認の「三大特権」を得ることで、実質の中央金融機関となって以降は純利益40パーセントを朝鮮部門が占めるほどになった。[[2]](#endnote-3)(2)

渋沢は後年、「之は自分から進んで出したと云うより政府から誘われたからで」[[3]](#endnote-4)(3)と政府主導の進出と語った。

**3.朝鮮への訪問**

1878年に早々と朝鮮に進出したものの、渋沢が朝鮮を初めて訪問したのは1898年5月であった。二度目は1900年11月の京仁鉄道の開通式参列、第一銀行23支店の視察がなされ、二度の訪朝を通じて現状を観察している。京仁鉄道は1897年に米国人モールスから、鉄道譲渡の申し出を受けた際に、渋沢は是非とも日本人の手によって建設したいという意思を持った。[[4]](#endnote-5)(4)しかし、周辺に出資を呼びかけたが受諾を得られなかったため、当時外相であった大隈重信を通じて説得した後に、ようやく引受組合ができ、1900年に京城―仁川の開通式にのぞんだ。1898年の初訪問の際に、仁川と釜山にて演説を行った。

英国国民が貿易上大成功の国民として称讃さるゝは一に後進国に対して誘導啓発するの要を忘れざりしにあり。然るに彼れの利害如何は我れの関する所にあらず、彼に大損あるも我に大利あれば可なりと、斯くの如きは決して彼我の貿易を進むる所以にあらずして、日韓貿易の将来に於いても最も心すべき事なり。[[5]](#endnote-6)(5)

日本のあるべきすがたと、国家の理想像をイギリスと考えていたことが見受けられる。イギリスの実業界での成功は、海運を発達させ、貿易を盛んにし、実益を獲得できる点にある。実業人が国の発展の先陣をきって、海外に於ける活動を援護する役割を担うべきであるという立場を示した。

1900年の二度目に視察の後に広島市にて講演も行っている。今回は、日本での開催のためか、韓国の現状を捉えた踏み入った発言もみられる。

朝鮮の現状の政治に関しては、「全くの腐敗の極に達し、国士の風あるのも皆無」[[6]](#endnote-7)(6)と、権力はすべて国王に統括され、政府の権力基盤は弱く、社会情勢が不安定だと述べており、地方政治については郡守が各地方を収めることになっているが、「少しにても財産有る人は郡守の目に触るゝときは怱ち之を奪掠せられ」[[7]](#endnote-8)(7)とあるように、財産の保護でさえもないと述べている。そうした実情からか、仮に貨幣を蓄財しても、たちまちに郡守に横奪されるという政治的傾向のために、仕事を大切にする気運は甚だないに等しく「実業上の経営をもってする者に至りては、実に寥々たる有様なり」[[8]](#endnote-9)(8)と、朝鮮には近代資本主義が成り立っていないことが強調された。

**4.渋沢の意図**

半島国の独立を扶植し、その保全を期図するには、政治の力でするよりは商工業[[9]](#endnote-10)(9)

実業的扶植をもって半島国を開発し、その実業上の関係を密接ならしめ、これが独立を擁護し、我邦の自衛を全うし、その間毫も韓国の独立を害すべき他の勢力の侵入し得る余地なからしむるよう奮闘協力をなし、韓国全土を挙げて我が利益線の県内におき、もって彼我の権益を保全すること、当今の一大急務なりと考ふるなり[[10]](#endnote-11)(10)

韓国開発の第一利益は鉄道布設に存するを以って……韓国の首産たる農産物将又鉱物

等の輸送を自由西、彼我の商業関係を円滑にせん乎、延いて韓国民生活の度を高め、生活の度茲に一新せん乎、従来の関係よりして交通の便利に因り我邦の製品の彼国の内地に販売せらるゝこと最も明白なる事情なりと信ず[[11]](#endnote-12)(11)

これらから読み取れるように、朝鮮を日本の経済圏ととらえている。国境を接する強国ロシア、イギリス、アメリカなどの欧米列強が独自に商取引を通じて朝鮮に関与しており、特にロシアを脅威と感じる意識から朝鮮を独自に保持していくことが重要な国益であると考えられていた。渋沢としては早急に状況を改善したかったと推察できる。そして、鉄道の敷設の重要さを説いている。鉄道の敷設が経済の発展に不可欠であることを確認し、交通網を整備し、商業と物流の活性化によって人々の生活を豊かにすることを構想した。実業家が少ない当時の朝鮮は自律的に近代国家としての発展をとげることが困難であり、商工業として発展の必要性。その実現には、貿易の増大、利用資源の開発、生産事業の振興、それらを円滑にすることが実業的扶植であると説いている。

1926年の雨夜譚会談話筆記にて｢朝鮮に対しては、早くから其開発の必要を考えて居られたのですか。｣[[12]](#endnote-13)(12)という質問に対し

韓国に対する私の考えは、三韓征伐とか朝鮮征伐とかに刺戟せられたものであらうが、兎に角朝鮮は独立せしめて置かねばならぬ、それは日本と同様の国であると考へて居つたのである。斯様に私は常に政治的のことは云はなかつたが、商売的観念から朝鮮に対した。[[13]](#endnote-14)(13)

朝鮮に限って実業家のわしも政治上の興味をもった。これは歴史に教えられたためであろう。私は常に考えて居った。日本の安寧を維持するにはどうしても朝鮮に勢力を占めなければならぬ。もし朝鮮がロシア、支那に占領されることがあっては到底日本は安寧を臨まれぬ。[[14]](#endnote-15)(14)

と述べている。「経済的な海外発展」を第一国立銀行などによって「商売的観念」から推し進めたと明言し、朝鮮を経済開発の対象としてとらえているようである。また、安全保障という観点からは、政治的観点から朝鮮への進出を正当化している。

**5.日韓併合に対する認識**

1910年8月、韓国併合条約が締結された。談話筆記にて「日韓併合に就いてはどう御考えですか。」[[15]](#endnote-16)(15)との質問に「合併には不賛成であつたが、今考へると已むを得ない、いや寧ろよかつたと思ふ。」[[16]](#endnote-17)(16)と答えるだけであって、特に質問に対して言及していない。いずれの質問に対しては積極的に対して、何か意味深な答えである。藤井賢三郎はこれを「事後の追認者」と評価している。独立を望みながらも、遺憾ながら両国関係が政治、軍事関係中心と成る経緯の中で朝鮮の独立を主張することもなく併合を認めたと述べている。[[17]](#endnote-18)(17)

**6.おわりに**

当初の進出は政府の促しによるものであったが、渋沢が参画した第一銀行が朝鮮の経済活動を掌握したことは結果論として「朝鮮進出の先導者」と位置づけられるのもやむを得ない。日本の実業人として当初は誰も進出しようとしなかった朝鮮へ進出し、実業的扶植に努め、金融を中心とする近代化を計り、インフラの整備を通じて日本との経済的結びつきを中心とする国家を構築することを試みた。win-winの関係を模索する意思を強く持ち続けたのであろう。しかしながら、朝鮮の国家の発展を望みながらも利益線ととらえ、主権を掌握する考えは批判されうるだろう。

1. 註

   (1)「対外事業」『渋沢栄一伝記資料』第16巻 [↑](#endnote-ref-2)
2. (2) 前掲『渋沢栄一伝記資料』別巻5, 636頁 [↑](#endnote-ref-3)
3. (3) 前掲『渋沢栄一伝記資料』別巻5, 636頁 [↑](#endnote-ref-4)
4. (4) 同上555頁 [↑](#endnote-ref-5)
5. (5) 同上5, 30頁 [↑](#endnote-ref-6)
6. (6) 同上50頁 [↑](#endnote-ref-7)
7. (7) 同上48頁 [↑](#endnote-ref-8)
8. (8) 同上46頁 [↑](#endnote-ref-9)
9. (9) 同上47頁 [↑](#endnote-ref-10)
10. (10) 同上52頁 [↑](#endnote-ref-11)
11. (11) 同上55頁 [↑](#endnote-ref-12)
12. (12) 同上535頁 [↑](#endnote-ref-13)
13. (13) 同上535-536頁 [↑](#endnote-ref-14)
14. (14) 同上 [↑](#endnote-ref-15)
15. (15) 同上536頁 [↑](#endnote-ref-16)
16. (16) 同上 [↑](#endnote-ref-17)
17. (17) 藤井賢三郎『評伝渋沢栄一』（水曜社、1992）56頁

    参考・引用文献一覧

    ・片桐庸夫 「渋沢栄一と朝鮮　―その対朝鮮姿勢を中心として」『慶應の政治学　国際政

    治』（慶応義塾大学法学部刊、2008）

    ・島田昌和『渋沢栄一の企業者活動の研究:戦前期企業システムの創出と出資者経営者の役

    割』（日本経済評論社、2007）

    ・片桐庸夫 「渋沢栄一と朝鮮　―京釜鉄道と京仁鉄道敷設問題を中心として」『渋沢研究』（渋沢研究会編集、2010）

    ・見城悌治 『渋沢栄一　道徳と経済のあいだ』（日本経済評論社、2008）

    ・青淵記念財団竜門社編纂『渋沢栄一伝記資料』（青淵記念財団竜門社刊 、1968） [↑](#endnote-ref-18)